

る。次に真宗近代化を教団機構の改革、辺地開教と海外布教、近代思想との関係の三つの面に把え、本山の改革、中間の本末関係の廃止、宗制寺法の制定、北海道、アジア、アメリカの開教、精神主義運動、新仏教運動、無我愛運動について述べる。

〔第十三章 現代における真宗〕 真宗諸派の近代的教育機構の整備改革と、地方の学校設立について述べる。次いで開教、児童保護、監獄教悔、救貧、社会教化等の社会活動とその意義をのべ、反省すべき点を指摘し、第二次大戦後の教団の民主化と再編成への動き―大遠忌待ちうけを通して真宗の将来について展望を試みる。

執筆者は赤松俊秀、石田善人、井上鋭夫、雲藤義道、笠原一男、柏原祐泉、金子昭式、北西弘、重松明久、竹田聴州、田村円澄、菅田慶恩、松野純孝、森岡清美、吉田久一の諸氏で、おのおの専門の部分を担当執筆している。本書の特徴はいわゆる通史としての平面的な叙述を避け、教団を中心に課題を設定し論述する方法をとっていることであり、真宗教団

史概論とでも称すべきものである。多彩な執筆者の面々が独自の視角から課題へ接近しながら、偏せず全体として調和が失われていない。教団史を中心とするものの豊かな真宗史研究の成果が、研究者達の手によつて整理され、一応、大系化せられた意義は大きい。待望の真宗史概説である。斯学にとざさる者とはもとより、教団の現実と宗門の未来に関心を寄せる者の必読書である。本書編輯の苦心と執筆の労に対して敬意を表したい。

A5版・五二八ページ・図版二八・索引三一ページ・一九六三年八月平楽寺書店発行 定価二五〇〇円

(名畑)

アジア史研究 第三

宮崎市 定著

宮崎博士の論文集「アジア史研究」第三が刊行された。本書には太平洋戦争終了の昭和二十年から後、およそ五年間に公けにされた論文等二十篇が収められている。いま、それらの内容を略述するに、

ほど、次の如くなる。

○アジア史とは何か

アジア地域の歴史の進展を地域・時代の二つの面より大観し、アジア各地域の発展がいかに鄰接地域の動きと関連をもつものであるかを述べてある。博士は先に「世界史序説」(アジア史研究第二所収)において、歴史とは本来世界史たるべきことを高唱されたが、本篇はそれと密接たる関係をもつものであり、アジア史の正しい理解は、世界史的立場より眺めることによつてのみ始めて可能であることを、具体的例をもつて、重ねて明らかにされたものである。

○中国史学入門総論

中国では書物の多いことを、「汗牛充棟」という言葉をもつて表言する。事実書物の多いこと驚く可きものである。歴史関係の図書だけ眺めても、基本的なものととしては、古代より明代に至る迄の各王朝の正史としての二十四(五)史を筆頭に、通典・通志等の九通あり、類書あり、政書・地志、通鑑類等々実におびただしい数に上る。本項は、かゝる根本的書物について、いかなる種類のものがあ

り、それらはどのように用うべきかを簡明に述べたものである。

○食糧から見た中国史

漢より二千年の間、食糧の多寡が王朝の盛衰にいかにか大きな影響を有していたかを具体的に述べ、又、歴代政權が食糧確保にどのような考慮を払っていたかを鳥瞰するなど、中国史上、食糧というのがいかなる力を有していたかを述べるものである。勿論、食糧のみによつて中国史が左右されることはあるまい。対象物を銀や塩に置き換えても、似たような筋書きのものができよう。しかし、洪範の八政の第一に食が置かれるように食糧の持つ力は大きい。身近なものに潜む偉大なる力を、改めて思い知らされる一文である。

○中国上代は封建制か都市国家か

周代初期の諸侯封建に基づいて、周代を封建制の時代と見るのが一般であつたが、その「周代封建制」の実態を明らかにし、周代の封建制とは、いわゆる「封建制」の実を有するものではなくて、分裂の素因の強い當時にあつて城郭都市結合の爲にとられた便法であり、中国上代

社会は封建国家と見るよりは都市国家と見なすべきであると述べたものである。

○清談

魏晉時代に栄えた清談なるものについて、その源流としての名教に根底を置く人物評論たる清義の発生より筆を起し、清談の清義からの分離がいかにして生じ、どのように変遷したかということ、又、彼の竹林の七賢に代表される清談派の放達の振舞いの論理とその限界等々を述べたもの。

○五代史上の軍閥資本家

五代の軍閥は武人であるとともに莫大なる財を有する資本家でもあつた。本篇はそういった軍閥資本家がいかにして形成され、またどのようにして消えて行つたかと、五代軍閥資本家消長の跡をたどり、加えてかゝる商業的軍閥資本家の下に育成された農民地主が、宋代の官僚資本家へ転身したのであれば、五代の軍閥資本家の果たした役割りを述べべる。

○宋の太祖被弑説について

古くから中国史家の間で論ぜられている宋祖被弑説を取り上げ、被弑説及び被弑説否定論を批判検討したものの。皇位継

承時に少なからぬ疑惑があり、太宗継承を正当づける「金匱の誓」なるものの存在も疑がわしいことを指摘し、皇位継承に當つて弑したか否かは不明にして、それ自体の持つ意義よりも、太宗自^レ立という事の方が、大きな意義を持つものである、これは単なる皇位継承ではなく、小革命であつたとして筆を収める。

○胥吏の陪備を中心として

中国官吏生活の裏面を窺つたもので、宋代の役人・胥吏に課される陪備なるものは、官吏蓄財の手段として行なれたところの離着任時の餽送が生誕上寿へ移行する中間に位するものであり、こうした面からも、宋代が中国社会の一大転換期であつたことが知られるということを示すものである。

○中国近世における生業資本の貸借について

中国近世において、都市に集中した資本がどのように運営されていたかを検討し、資本所有者と事業経営者との分離傾向があり、又、都市にては零細なる生業資本の需要が強く、ここに高金利の因が存することを言い、都市住民の間に貧

富の差が甚だしくなり、資本の貸し主と借り主との間に事実上の隷属關係を生じていたことを指摘し、更に、上下の階級が判然と分かれた社会においても尚且つ存在する所の中間層の有する意義にも言及する。

○合本組織の発達

中国近世都市における企業資本零細化に伴う筈の合本組織の発達を取りあげたもの。合本組織は古く宋代に始まり、清代に至つて全国的に普及したが、それは合資企業的な色彩が強く株式企業的性質のものではないとし、かゝることが、五港開港以後に株式組織が成功し難かつた原因となるものであると言う。

○宋学の論理

宋学の根本となる太極図説の解明から入つて宋儒の言う理氣の學説を追求し、これらを基として宋儒の論理を述べたもの。中国哲學専門の人々によつて言われていることに拘束されることなく論ぜられていたものであつて、自然、既成概念とは異つた色彩を有している。宋學というものを検討するに當つての新しい足場を提供したのと言う可きである。

○中国近世の農民暴動

中国近世に頻発する大小の反乱をもつて農民運動と目するものが、昨今の史家の可成りの部分の人の流儀である。これに對して、博士は、かかる反乱が農民運動と称されるには、その動機において農民が階級的意識をもつて立上つたかを始めてとして合計三つの条件の内の何れかを満足させねばならない、と設定し、鄧茂七の乱發生より終熄に至る迄の經過を詳述し、いかなるものをもこそ農民運動と認める可きかを明らかにしたものである。近世における反乱を取り上げて、総べて農民運動として目しようとする一派の人々に対する頂門の一箴となるう。

○帖木兒王朝の遣明使節

遣明使節の日記の記載を中心として彼等の日常を述べたもの。中国資料からでは探し得られないであろう事項の若干が記されている他、中華的礼節と非中国文化圏の人々の世界觀との食い違いが、外交の上にとのうに厄介なものであるかが知られて興味深い。

○中国近世銀問題略説

明清時代における銀の流入流出がいかに

なる状態の下に起こり、その流入流出が中国国内にどのような影響をもたらしただかということ、則ち、外国貿易と中国社会との關係を述べるものである。

○十八世紀フランス絵画と東亜の影響
十八世紀にフランスを中心とするヨーロッパ諸国における中国趣味の評価は、人によつて、かなりの相違がある。ここで博士はその中国趣味がいかになり行つたかを究明すべく、Watteauを始めとする数人の画家の作品を取り上げて、各々の構想の源を求めた。その結果、殊に風景画においては、西洋のそれが中国画の影響のもとに始めて発達したのではあるまいかという先人（長寿吉博士）の説に賛意を表し、他に、中国絵画の西方世界に向かつての刺戟がどのようなコースを歩んだかということについて、博士独自の一つの系統をも持ち出してある。

○章学誠の文章論

「六経皆史也」（文史通）と唱えた清朝の史學者章学誠が、文章というものをどのように見ていたかを述べる。章氏の意見では「文章は道を載せるものである。史は文によつて立つ」と言う。かゝる觀念

から、その文章論は単なる修辭法ではなくして、万世不易の道と結びついた独特の道德論となるのであり、文章とは、要するに只ありのまゝを書く可しというのが、章氏の文章論の帰着する所となる。

これは実事求是の精神であり、彼の經學より發した実事求是の精神は、その文章論においておよそ行く可き処迄行きついている、というのが本篇の帰結である。

○日本史と世界史との關連

日本史の發展を三分法による時代区分をもつて他國と対比し、それらの文化による影響や、先進文化國家を目の前にした後進國家の追隨への努力途次における歪みのもたらすものを指摘する。博士の持論は、一國一民族の歴史は決して他國他民族と全く無關係に發展するものではなく、多少なりとも外界と交渉をもつものである。しかるが故に、一國の發展は外界との交渉を考慮に入れなければ、正しく理解することはできない、という所であり、そうした博士の手法がはつきりと打ち出された一篇である。

○大戦前チベット外交論

シムラ會議以後の民国初頭におけるチ

ベットを舞台とする中國・チベット・イギリス三者の動きを追求したもので、關係せる三者の意圖する所がよく窺われて興味深い。シムラ協約が有効か否かはさておき、この協約においてチベットに対する中國の宗主權を三者ともに認めていたという如きは見逃してはならぬ一事である。近年の中國とチベットとの間に生じた諸般の問題を眺める上に多大の參考となるものであること明らかである。

○清朝における國語問題の一面

中國の近世は、非漢民族による漢族統治が繰り返されたが、異民族による支配は、當然言語の相違という難關に遭遇する。かゝる難題解決の一法は翻訳であり、清朝の内閣には翻訳機關としての役割りが大きな比重を占めていた。他方、中央地方の衙門にもそれ／＼翻訳機關が設けられていた。こうしたことは、滿州語が勢力を有してこそ意義があるのであるが、その滿州語は結局は漢語に圧倒されてしまい、官府の翻訳關係の部署は多く閑職と化してしまつた。漢語の勝利は滿文化の、漢民族の勝利である。本篇はこうした翻訳機關の設置・拡充・衰

退の過程を細しく見つけ、言語対策を通して清朝の漢民族統治の姿を捉えんとしたものである。

○雜 録

これは數篇より成り立つ。『四角・六角・八角』は、これらの角形を用いた模様を使用する文化圏とその住民の国民性・文化交渉等を述べたものである。『狩野博士の「中國哲學史」』は博士への思ひ出と本書の有する至高の價值を述べるものであるが、その間、時として宮崎博士の歴史學觀とも言う可きものが登場する。『歴史家としての狩野博士』は、京都支那學派の領袖として認識される同博士が、歴史學に対しても極めて卓越した識見を有し、事實、清朝制度研究の面において偉大なる業績を挙げて居られることなど、優れた歴史家としての狩野博士の一面を紹介する。『本を語る』は、中國のことを學ばんとする者につき纏うところの「分量膨大にして且つ不便なる形式的書物」という厄介者を相手として來られた博士の、そうした書物をめぐる苦勞話である。

以上が本書に収められた諸篇のあらましである。大著の紹介としてはまことに粗末なものに終始してしまい、猫の子を描くことすらできなかった。かてゝ加えて、論旨を取り違えていないやも料られない。蕪難なる紹介に惑わされることなく、一度は本書を手にとつていただきたい。得る所、極めて大なるものがあること明らかである。

A4、本文四二六頁、昭和三十八年二月
東洋史研究会発行、価一七〇〇円

(滋野井)

自我と無我

—インド思想と仏教の根本問題—

中 村 元 編

人間は生きているかぎり自我の觀念をもつていて、それが人間の行動を裏づけているのであるが、その根底に横たわる真実なる「自己」とは一体何であるか？この問題に真正面から対決した諸学派によつて、我（アートマン）が説かれるに至つた。しかしこの自我の觀念はときと

して「我執」ともなつてあらわれる。この点から対決し「我執」「我所執」を捨てるべきであると極力主張したのは仏教の無我説であつた。本書はこういつた問題を体系的に論じたものであり、わが国の東西諸大学における第一線の学者達がそれぞれの専門分野を担当してあらゆる角度から検討している。序論（中村元）は仏教の無我説そのものがどのような立場にもとづいて成立したか、またインド一般の私の思想とどのような関係をもつかを論じたものである。第一部は、インド思想におけるアートマンの問題について、古ウパニシャッド（高崎直道）、ジャイナ（宇野惇）、サーンキヤ（山口恵照）、ニヤヤー（宮坂宥勝）、バガヴァッド・ギーター（原史）、イーシュヴァラ・ギーター（瓜生津隆真）などの多方面から論じ、また宿命論、無因論、有神論に対する仏教の批判（雲井昭善）も載せられている。第二部はいわゆる仏教の無我説について、無我と主体（平川 彰）の問題を初めとして、ミリンダパンハ（早島鏡正）、俱舍論（桜部建）、中論（梶山雄一）、唯識（勝呂信静）に出ず

る無我説がどのようなものであるかを詳しく論じている。また、真理綱要（Tattvasaṅgraha）に出ずる「ミーマンサー、サーンキヤの私の思想（服部正明）」も載せられている。第三部はアートマンと西洋哲学との比較にまで言及し、古代中世（川田憲太郎）と近世（玉城康四郎）の哲学との両面から「我」の問題を検討している。

こうした「我」の問題は、仏教思想を正しく把握するために是非とも必要であり、今迄にも度々研究がなされてきたが（本書巻末「私の問題に関する研究文献」参照）、今度のように多数の一流学者が、あらゆる方面から検討し、巧みにまとめた書は珍しい。今後の学界に寄与するところも大きいと思う。

A5版、本文七一九頁、昭和三十八年
六月刊、三〇〇〇円 平楽寺書店

(舟橋尚)